

2019年7月 10 日

東員町議会

議長 三宅耕三 様

東員町議会

大崎潤子

### 研修報告書

研修期間	<u>2019年 6月 27 日 (木)</u> ～ <u>6 月 28日 (金)</u> 【 2 日間】
研修（視察）先	・長野県軽井沢町 ・長野県川上村
目的（テーマ等）	● 議会報告会の手法及び現状について ● 通年議会導入による議会活動について ● 教育施設(中学校)建設における補助金等の活用方法について
資料添付の有無	無

※ 研修概要、内容、所感などは、次ページにご記入ください。



[委員（議員）氏名： 大崎潤子]

軽井沢町は長野県の東の玄関口にあり、浅間山や緑豊かな自然に恵まれた高原の町です。多くの保養・観光客が訪れる観光都市でもあります。

最初に観光協会から「観光で地域を豊かにする」住んでよし、訪れてよしの地域観光で盛り上げていることや雇用の場になっているとの説明を受けました。

前議員の内堀次雄氏は、通年議会や議会報告会の現状について以下のように話されました。

「通年議会の導入は、議会としての権利権能を取り戻すべきとの故岡本光雄全国町村議会議長会調査部長の講演を聴講し、地方分権推進の中で議会も変わらなければならないと動き出し、平成22年3月から12月まで試行実施し、翌年1月から本実施になり、現在に至っている」強調されたことは「議会は町民に理解をしてもらう努力をしておこななかった。信頼されない、開かれていない議会であった。また、議会がなかったら、予算や条例を執行することができないことをしっかり伝えておこななかったから、議員削減をせよ、との声が町民から出てくることになる。信頼される議会をどうつくるのか、住民の声をどう吸い上げて政策提言に結び付けていくかが大切である」と話されました。

通年議会は議会活動が中断する「閉会中の期間」をなくすことにより、チェック機能の充実・強化を図り、民意の反映や災害時緊急対応など、議会の主体性、機能性を高め、本会議がいつも議会主体で再開できる。町側で緊急を要する案件の場合、議長召集で議会をいち早く再開でき、町側にとってもメリットと言える。常任委員会開催日数も増え委員会活動が充実しているとのこと。

議会報告会については、平成20年から議会活動の状況を、出向いて町民委直接報告することを目的として「議会報告会」を町内3会場でスタート。議員から一方的に報告をする会だったため参加者は減少した。全員協議会で議論を重ねて名称を「議会とまちづくりを語る会」として、住民と議会の意見交換を主とした内容に変更して、参加者増になっていますが、現在は全体的に参加者が減少傾向にあるとのこと。工夫として、机の配列や参加者が自由に意見や希望を書けるメモ用紙を配布しています。政策提言につながるヒントを頂く活動の中で住民の声を大切にしているが、参加者を募るのが大変である、と話されました。

<所感>

通年議会を導入するにあたり、リーダーシップを発揮された前議員の話しに圧倒されました。東員町の定数削減、報酬削減に手きびしい言葉を貰いました。議員は積極的に勉強すること、議会の大切さや、議会の権能を町民にしっかり伝えることを強調されたこと、また、議員間の自由討議を大切にし、議会に団結することの大切さも強調されました。この点は、東員町の弱点の部分であると思います。もっと議員間で話し合いの場を持つこと、委員会としての取り組みを強化する必要性を強く感じました。まずは、10月開催の第1回議会報告会への取り組みを通して議員同士の団結を強めて成功させることだと思います。

[委員（議員）氏名：大崎潤子]

川上村は千曲川源流の里として、ゆたかな大地と広大な森林に恵まれた自然豊かで林業を中心として栄え、レタス産業は全国シェア 80%を占める村です。

知は力なり、教育は大切であることから、村内産カラマツを活用した 21 世紀に適応した先進の学び舎を研修しました。

「林業の文化を子どもたちに伝えたい」という願いのもと「祖父母が植え、親が育てたカラマツで、孫が学ぶ新校舎」を合言葉に「村内産カラマツ」を中心に建てられた中学校校舎は平成 20 年 7 月に完成。木造(一部 RC 構造)で耐震性を確保した準耐火建物で、100 年もつと言われていています。

コミュニティースクールの機能を持たせるために体育館と音楽堂には、村民用の出入り口を設けています。また、エネルギー資源節約のためにパシングソーラシステムを一部導入しています。ランチルームは天井を高くし、2 面をほぼガラス張り、明かりを支える支柱や、机、椅子は村内産カラマツを使用し、温かな交流を深める空間となっています。

柔らかな日差しが入る大きな窓や、ゆったり感のある廊下、段差を左右で変えた階段など、将来的な機能変化や改修時に容易に対応でき、融通性に富んだ内部間仕切りになっており、時代変化に対応できる建築になっています。

総事業費は 19 億 7400 万円、補助金、交付金は 9 億 3400 万円との説明を受けました。(文部科学省、林野庁、県補助)。

<所感>

ビックリする斬新なデザインの校舎でした。木材のぬくもりや大きなガラス窓からの日差しをいっぱい浴びることのできる校舎で学ぶ子供たちは幸せだなー、と思いました。単に格好良いデザインというだけでなく、使用する側（生徒や親）を大切にすることが反映されていると感じました。

一中の移転構想が本格的に動き出しました。検討委員会や建設委員会はどうなっているのか、情報提供が少ないようです。一中の移転は、これからの「まちづくり」の核になる重要なテーマです。様々な角度からの研究、話し合いが大切だと思います。そして、町民への情報公開をないがしろにせず進めるべきと考えます。

今回の研修で、本町の一中建設に当たって後世に禍根を残すことのないよう、議会、行政が叡智を結集して臨むことが大切であることを痛感しました。